

(一) 次のA・Bの文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A

福沢諭吉は、慶応三年（一八六七）、「政治経済学教本」等を抄訳して刊行した（『西洋事情外編』）。その第六章 Society: a Competitive System は、「世人相励み相競争事」と題されている（「争い」という字は避けたのである）。そして、同章をほぼ忠実に訳して、こう述べている。

草昧不文の世に在りては、人を害せざれば自ら利すること能はず。故に心身活発にして、事を成す者は常に盗賊なり。文明の世に於いては然らず。富貴利達を致す者は常に他人の利益を成したる者なり。

文明の教へ漸く行はれ、人々徳行を修め智識を研くに至りて（中略）人自ら利達を求むれば、共に他人の利達を致し、人自ら富福を求むれば、自己の力を用ひて他人の物を貪ることなし。

要するに、「人生は互ひに害を為さずして各々其の富貴青雲の志を達すべく、加之互ひに相励み相競争ひて却つて世間の利益を致す可し。故に家族の間、親愛慈情を主として相競争の心なきは、老幼小弱を助けしめんが為なり。世上の交際に於いて互ひに先を争ひ互ひに利達を求めて其の弊なきは、世界一般の利益を為さしめんが為なり。」というわけである。このように、「文明」の世では、競争はゼロ・サム・ゲームではなく、個人の「利達」の追求がおのずから「他人の利達」にもなると観念できるのであれば、競争を拒否する理由はかなり弱まろう。

そして、翌年、明治新政権が成立した。身分制度が崩壊し、突然、「文明開化」civilization が流行語となった。文明開化派の知識人たちは、「外国に競うて文明を争ふ」（福沢諭吉『学問のすゝめ』五編、一八七四年刊）ことを急務と考えた。スマイルズの Self-Help（一八五九年刊）は『西国立志編 原名自助論』と訳されて（一八七一年）、大いに読まれた。日本が対峙している「文明国」の人が説く、勤勉と節約が出世の秘訣だという（実は、庶民向け教訓書や二宮尊徳の教えでかねて馴染みの）議論は、大いに説得力があった。

福沢諭吉は、「文明開化は即ち競争の間に進歩する」「現時の社会は即ち競争の一大劇場」（『国会論』一八七九年）と確信し、堂々たる競争への参加を呼びかけた。

彼は、彼の憎む「門閥制度」の破壊によって「自由」をもたらしにくれた明治の世において、各人に「自由にはしめ、自由に働かしめ、富貴も貧賤も唯本人の自ら取るに任して他より之を妨げないことを望む。そのような場では、<sup>a</sup>「怨望」、則ち成功者に対する妬み・そねみは慎まなければならぬ。成功者を妬んでその足を引張り、自分並みに引きずり下ろそうとしても、結局、誰のためにもならない。「怨望」は、競争者としての市民において、最低の「不徳」である。嫉妬してはならない。ルサンチマンなど、持つてはならない。自分も、あのようになろうと努力すれば良いのである。「怨望に易ふるに活動を以てし、嫉妬の念を絶つて相競争の勇気を励まし、禍福毀誉悉く皆自力を以て之を取り、満天下の人をして自業自得ならしめんとす」べきなのである（『学問のすゝめ』一三編、一八七四年刊）。

「自業自得」は、現代日本語では、普通、悪事の報いについて言う。良い語感ではない。しかし、福沢においては、正々堂々と競い、「自業自得」となるべきなのである。つまり、自己決定し、自分で努力し、その結果をみずから引き受ける、人々がそのように競うのが（現段階での）「文明」社会なのである。「自助」と「自己責任」！ すばらしい「自業自得」の社会！<sup>b</sup>そこでの悪徳は、激しい競争心ではない。よき競争者でないことである。儒学者が普通信じる「文明」とは異なる、新しい「文明」の原理であった。

福沢によれば、「私利」の追求も、恥ずべきことではない。「私利は公益の基にして、公益は能く私利を営むものあるに依つて起こる可きもの」である。現に、自他双方のためになることは、「其利永続」するが、自分のみに利益になり、他に害を与えるような商売は続かない。「永き間に平均して利益を永続するが如き私利」は、「自ら益し世を益し、期せずして暗に公益と符合する」のである（「私の利を営む可き事」一八七七年）。

この議論には、義と利との弁別に厳しい朱子学者などは、眉をひそめるであろう。しかし、売り手と買い手の双方が満足する商売は永続して、結局、大きな利益になるという考えは、維新前にもあった（市場の一面についての、一種の経験則であろう）。ただ、それが当然に「公益」にもなるという新しい主張を、福沢は付加したのである。

これらの主張に呼応するような知的伝統は、日本にも確かにあった。したがって、信奉者も、当然いた。しかし、抵抗も大きかった。

※ 第一に、当時は、政治・社会・経済の激変期である。貨幣制度も変動し、景気も激変した。それらは、突然の「立身」「出世」の機会を増し、野心的な若者の「立志」を誘いもした。しかし、それらを利用するといふよりはそれらに翻弄される多くの人々にとつて、「自由競争」はすばらしいとは思ひ難かつたであろう。以前の職業への規制が緩和され、各人が思いのままに利益を追求する結果、激しい混乱が起きていたのである。

そのような中、往々何人もの「権妻」を持ち、得意顔で浪費する「成金」「俄分限」を見ると、「富は、ただ道徳的な人間にのみもたらされる」とは信じ難かつたであろう。明治の通俗小説において、「アリス」（貸金業者。高利貸し〈氷菓子〉の洒落）は、常に憎むべき冷酷漢として描かれる。冷酷だから金融業で成功しているのだという常識である。「紳商」「奸商」「姦商」への（嫉妬を交えた）反感は、消えることが無かつた。

第二に、次々と、しかも往々場当たり的に打ち出される政府の「殖産興業」策に左右される当時の市場は、自由で公正な競争の場とは言い難かつた。商法・会社法等の法的整備は大幅に遅れた（一部施行が一八九三年）。政府高官に取

り入った「政商」「官商」が大儲けする有様では、自由経済市場を守り、支えるために政府があるのだ、などという実感は持ち得なかつたであろう。しかも、当時はナショナリズムの勃興期である。「立志伝中の人となる」成功者が仰がれるのも、「国」への貢献ゆえであつた。成功自体が有徳であることの証しだからではなかつた。

第三に、従来、それなりに「競争」を肯定する感覚があつたのは、概ね町人身分だけだつた（村の中にも競争はあるが、露骨な競い合いを避けなければ、村請制度からして必須の村の平和は維持できない）。それも、より安定した状況での長期取引を想定していた。その上、「市場道德」論は、もともと、権威ある学者の意見ではなかつた。

かくして、翻訳による **X** は、旧来の知的道德的通念のみならず、当時の多くの人の実感とも距離があつたのである。「人生は競争だ。目上への奉仕と依存や、仲間内の和合と平穩よりも、毅然とした自己利益の追求が重要だ。それでこそ、世のため、御国のためにもなるのだ」という論理は、「忠孝」の教えに馴染んだ頭にも、激愛への対応に苦しむ心にも、ともかく波風を立てず、誰からも反感を買わないように小心翼翼と生きる多くの庶民男女の情にも、容易に浸透しなかつた（日本の農民は、大農場を持つ独立自営農民ではない。寒冷な「蝦夷地」を除き、いざとなれば容易に移住できる広大な西部のフロンティアもなかつたのである）。そして、勿論、かねて特権を有する人々は、齷齪と競争すること自体を、高踏的に侮蔑していた。

他方、早くも、社会主義が紹介され始めた。例えば、一八八二年、城多虎雄は、「私産ノ制」「競争ノ法」を批判した。彼によれば、「富貴」の多くは「素性ト僥倖」によるに過ぎない。しかも、その手段は、往々、「邪悪奸猾、詐欺諂佞」である。たまたま幸運に生まれ育ち、幸運に恵まれた者が、悪辣な手段によつて富貴を獲得するという仕組み自体が、おかしいというのである。彼が「利ハ利ト相争ヒ、欲ハ欲ト相制ス。是ヲ以テ、嫉妬、猜疑、憎忌の悪徳、争ウテ生ズ」る「今ノ社会」に對置したのは、老子の理想郷だつた（『論欧州社会党』）。

こうして、自由競争論は、古い思想に加え、（古い思想と結合した）別の新しい輸入思想にも攻められ、挾撃されたのである。

競争は、経済・社会・政治・教育・国際関係等、あらゆる分野に関係する。また、競争は、倫理・自由・正義にもかかわる。とりわけ近現代を生きていく以上、おそらく完全に逃れることも、無視することもできないのである。

結局、競争というものをどう理解し、どう評価するのが正しいのだろうか。そもそも競争は、ある方がよいのか、無い方がよいのか。良い競争と悪い競争があるのか。それとも、分野や程度によるのか。競争は、結局、多くの人を幸福にするのか。また、人を育て、鍛え、立派にするのか。それとも、ただ勝者を傲慢に、あるいは偽善的に、そして敗者を卑屈に、あるいはシニカルにするだけなのか。そして、「負け」続けた人々は、どうすればよいのか。「負け」続けた人々が、「怨望」とルサンチマンを蓄積し、「自由な競争」の仕組み自体を憎み、さらには「自由」そのものを敵視することにならないのか。もしも積もり積もつた「怨望」が爆発し、社会的・経済的・政治的な「自由な競争」の仕組み自体を破壊したならば、その後、いったい何が残るのか。また、資源・環境は有限であつても、経済競争が否応なくもたらす「発展」を永遠に続けるのか。

これらの競争をめぐる問題は、消滅したわけではない。むしろ、ますます深刻になつていようである。「門閥制度」を憎み、その廃止を歓迎した福沢のいう「自業自得」が、もしも「近代」の原理そのものであるとするならば、それらは、少なくとも「近代文明」の続く限り、人類を、それ以前にも増して、絶え間なくさいなむことであろう。

（渡辺浩『明治革命・性・文明』による）

### 注

ゼロ・サム・ゲーム……利益と損失の総和がゼロになるといふゲーム。経済理論の一つ。

スマイルズ……サミュエル・スマイルズ。イギリスの作家・医者。（一八二二〜一九〇四）

二宮尊徳……江戸時代の経世家、農政家、思想家。（一七七八〜一八五六）

ルサンチマン……怨恨、憎悪、嫉妬などの感情。

城多虎雄……明治時代の新聞人。（一八五六〜一八八七）

奸猾……悪賢いこと、またその人。諂佞……人にこびへつらうこと、またその人。

**aB** 凡そ人間に不徳の箇条多しと雖も、其の交際に害あるものは怨望より大なるはなし。貪吝、奢侈、誹謗の類は、何れも不徳の著しきものなれども、よく之を吟味すれば、其の働きの素質に於いて不善なるにあらず。これを施す可き場所柄と、其の強弱の度と、其の向かふ所の方角とに由りて、不徳の名を免るることあり。

右の外、驕傲と勇敢と、粗野と率直と、固陋と実着と、浮薄と穎敏と、相對するが如く、何れも皆働きの場所と、強弱の度と、向かふ所の方角とに由りて、或いは不徳とも為る可く、或いは徳とも為る可きのみ。独り働きの素質に於いて全く不徳の一方に偏し、場所にも方向にも拘はらずして、不善の不善なる者は怨望の一箇条なり。怨望は働きの陰なるものにて、進んで取ることなく、他の有様に由りて我に不平を抱き、我を顧みずして他人に多を求め、其の不平を満足せしむるの術は、我を益するに非ずして他人を損するに在り。譬へば他人の幸と我の不幸とを比較して、我に不足する所あれば、我が有様を進めて満足するの法を求めずして、却つて他人を不幸に陥れ、他人の有様を下して、以て彼我の平均を為さんと欲するが如し。所謂これを悪んで其の死を欲するとは此の事なり。故に此の輩の不幸を満足せしむれ

ば、世上一般の幸福をば損ずるのみにて、少しも益する所ある可からず。

或る人云はく、欺詐虚言の悪事も其の實質に於いて悪なるものなれば、之を怨望に比して執れか軽重の別ある可からずと。答へて云はく、誠に然るが如しと雖も、事の源因と事の結果とを区別すれば、自づから軽重の別なしと云ふ可からず。欺詐虚言は固より大悪事たりと雖も、必ずしも怨望を生ずるの源因には非ずして、多くは怨望に由りて生じたる結果なり。怨望は恰も衆悪の母の如く、人間の悪事、これに由りて生ず可からざるものなし。疑猜、嫉妬、恐怖、卑怯の類は、皆怨望より生ずるものにて、其の内形に見はるる所は、私語、密話、内談、秘計、其の外形に破裂する所は、徒党、暗殺、一揆、内乱、秋毫も国に益することなくして、禍の全国に波及するに至りては、主客共に免るることを得ず。所謂公利の費を以て私を逞しうする者と云ふ可し。

怨望の人間交際に害あること斯くの如し。今其の源因を尋ぬるに、唯窮の一事に在り。但し其の窮とは、困窮、貧窮等の窮に非ず。人の言路を塞ぎ人の業作を妨ぐる等の如く、人類天然の働きを窮せしむることなり。貧窮、困窮を以て怨望の源とせば、天下の貧民は悉皆不平を訴へ、富貴は恰も怨みの府にして、人間の交際は一日も保つ可からざる筈なれども、事実に於いて決して然らず、如何に貧賤なる者にも、其の貧にして賤しき所以の源因を知り、其の源因の己が身より生じたることを了解すれば、決して妄りに他人を怨望するものに非ず。其の証拠は故さらに揭示するに及ばず、今日世界中に貧富貴賤の差ありて、よく人間の交際を保つを見て、明らかに之を知る可し。故に云はく、富貴は怨みの府に非ず、貧賤は不平の源に非ざるなり。

是に由りて考ふれば、怨望は貧賤に由りて生ずるものに非ず。唯人類天然の働きを塞ぎて、禍福の来去、皆偶然に係る可き地位に於いて、甚だしく流行するのみ。昔孔子が、女子と小人は近づけ難し、扱々入り入りたる事哉とて歎息したることあり。今を以て考ふるに是夫子自ら事を起こして、自ら其の弊害を述べたるものと云ふ可し。人の心の性は、男子も女子も異なるの理なし。又、小人とは下人と云ふことならんか。下人の腹から出でたる者は必ず下人と定まりたるに非ず。下人も貴人も、生まれ落ちたる時の性に異同あらざるは固より論をまたず。然るに、此の女子と下人とに限りて取り扱ひに困るとは何故ぞ。平生卑屈の旨を以て周ねく人民に教へ、小弱なる婦人下人の輩を束縛して、其の働きに毫も自由を得せしめざるがために、遂に怨望の氣風を醸成し、其の極度に至りて、流石に孔子様も歎息せられたることなり。元來人の性情に於いて、働きに自由を得ざれば、其の勢ひ必ず他を怨望せざるを得ず。因果応報の明らかなるは、麦を蒔きて麦の生ずるが如し。聖人の名を得たる孔夫子が、此の理を知らず、別に工夫もなくして、徒らに愚痴をこぼすとは、余り頼母しからぬ話なり。

又近く一例を挙げて示さんに、怨望の流行して交際を害したるものは、我が封建の時代に沢山なる大名の御殿女中を以て最とす。其の一例を見ても、大抵世の中の有様は推して知る可し。

人間最大の禍は怨望に在りて、怨望の源は窮より生ずるものなれば、人の言路は開かざる可からず、人の業作は妨ぐ可からず。試みに英亜諸国の有様と我が日本の有様とを比較して、其の人間の交際に於いて孰れかよく彼の御殿の趣を脱したるやと問ふ者あらば、余輩は今の日本を目して全く御殿に異ならずと云ふには非ざれども、其の境界を去るの遠近を論ずれば、日本は尚これに近く、英亜諸国は之を去ること遠しと云はざるを得ず。英亜の人民、貪吝驕奢ならざるに非ず、粗野乱暴ならざるに非ず、或いは詐る者あり、或いは欺く者ありて、其の風俗決して善美ならずと雖も、唯怨望隠伏の一事に至りては、必ず我が国と趣を異にする所ある可し。今、世の識者に民選議院の説あり、又出版自由の論あり。其の得失は姑く擱き、元と此の論説の起る由縁を尋ぬるに、識者の所見は、蓋し今の日本国中をして古の御殿の如くならしめず、今の人民をして古の御殿女中の如くならしめず、怨望に易ふるに活動を以てし、嫉妬の念を絶ちて相競ふの勇氣を励まし、禍福毀誉悉く皆自力を以て之を取り、満天下の人をして自業自得ならしめんとするの趣意なる可し。

右の次第を以て考ふれば、言路を塞ぎ業作を妨ぐるの事は、独り政府のみの病に非ず、全国人民の間に流行するものにて、学者と雖も或いは之を免れ難し。人生活発の氣力は、物に接せざれば生じ難し。自由に言はしめ、自由<sup>e</sup>に働かしめ、富貴も貧賤も唯本人の自ら取るに任じて、他より之を妨ぐ可からざるなり。

(福沢諭吉「学問のすゝめ」による)

注 貪吝……財をむさぼって出し惜しみすること。

奢侈……必要な程度や身分を越えたぜいたく。

誹謗……他人を悪く言うこと。

固陋……頑固で視野が狭い様子。

問一 Aの文章に、傍線部a「怨望」、則ち成功者に対する妬み・そねみは慎まなければならぬ」とあるが、「怨望」の原因(源因)についてBの文章ではどのように述べているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人の自由な言論や活動の妨げられていることが「怨望」をもたらしている。
- ロ 果てしない欲望が人々の不平をかき立てて「怨望」の引き金となっている。
- ハ 経済的格差の拡大が人々の不満を増大させて「怨望」を生み出している。
- ニ 社会的問題により政策を打ち出せないことが「怨望」の要因となっている。
- ホ 人々が自由競争に駆り立てられていることが「怨望」の母体となっている。

問二 Aの文章に、傍線部b「新しい「文明」の原理」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 身分制度が崩壊して実現した、近代国家の新しい原理
- ロ 勤勉と節約が出世の秘訣となる国際社会の新しい原理
- ハ 競争して私利を追求することが公益となる新しい原理
- ニ 売手と買手双方の満足する商売が永続する新しい原理
- ホ 立身出世の機会が増え、若者の立志を誘う新しい原理

問三 Aの文章に、傍線部c「抵抗も大きかった」とあるが、その理由の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 各人が思いのままに利益を追求することで激しい混乱が起こっていたから。
- ロ 法整備が遅れ、当時の市場は自由で公正な競争の場とは言いがたかったから。
- ハ 競争は当時の人の実感と距離があり、特権階級もそれを侮蔑していたから。
- ニ 競争を肯定する感覚を持っていたのは町人身分出身の人々だけだったから。
- ホ 従来の知的道徳的通念とも、文明開化期の知的伝統とも一致していたから。

問四 Aの文章の空欄  X  に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 自由民権論
- ロ 自己本位論
- ハ 富国強兵論
- ニ 競争歓迎論
- ホ 殖産興業論

問五 Bの文章に、傍線部d「凡そ人間に不徳の箇条多しと雖も、其の交際に害あるものは怨望より大なるはなし」とあるが、「怨望」とその他の不徳が異なる理由として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ その他の不徳は、怨望から生れた結果だが、怨望は諸悪の根源であり、人の悪事はこれから生じたものである。
- ロ その他の不徳は、階級や性別などの社会的格差によってもたらされるが、怨望は人心の乱れが生むものである。
- ハ その他の不徳は、程度や方向により徳になることもあるが、怨望のみはいかなる場合も人を損じる不徳である。
- ニ その他の不徳は、その根本的な性質において悪いものではないが、怨望は世上の誰も幸福にしないものである。
- ホ その他の不徳は、必ずしも怨望の原因にはならないが、怨望はその他の不徳の原因となり暗殺や内乱が生じる。

問六 Bの文章に、傍線部e「自由に言はしめ、自由に働かしめ、富貴も貧賤も唯本人の自ら取るに任して、他より之を妨ぐ可からざるなり」とあるが、この考えを端的にあらわした漢字四字の熟語をAの文章の※以降から二つ抜き出して、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問七 A・Bそれぞれの文章の内容と合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ Aの文章によれば、福沢諭吉は、「個人の利達」につながるがゆえに、「他人の利達」「世界一般の利益」をとがめてはならないと考えていた。
- ロ Aの文章によれば、社会主義者は、競争の果てに誰もが平等に暮らせる理想郷があるものと信じて、競争を否定すべきではないと考えていた。
- ハ Aの文章によれば、競争は近現代を生きていく以上回避できないものだが、経済競争のもたらす「発展」が永遠に続くかどうかは分からない。
- ニ Bの文章によれば、民選議院の開設や出版の自由などの議論は、必ずしも日本国に競争を奨励して自業自得を実現しようとするものではない。
- ホ Bの文章によれば、怨望は人の幸不幸を平均化しようとするが、そのやり方は、ただ他人を不幸に陥れて自らの不平を満足させるものである。
- ヘ Bの文章によれば、孔子が女子と小人をおとしめたのは、彼らが性別や階級の格差のために自由に振舞えないことを知っていたからでもある。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

沈黙とは一般的に口をきかず、黙り込んでいることを言う。口を閉じて言葉を交わさないこと、あるいは言葉と別次元に立たされ黙っていることなど、沈黙が指す内容はさまざまである。通常、ひとり静かにいる時のことを沈黙とは言わない。しかし深い瞑想の状態は沈黙に通じよう。

しばしば、二人以上の間の無言の持続に沈黙をみる。お互いに黙っている場合もあれば、片方の発言に無言で対応することもある。黙って何かを認め合うこともあれば、無言で拒絶を表現することもある。沈黙という言葉は、人間同士の間で起こることに限らない。人が、動物、植物または山や海、岩や大地、壁や空家などに向き合った時にも現われる事柄である。人間同士でも、敵対関係、友人関係、男女関係、見知らぬ間柄では、沈黙の度合いや色合いが違ってくる。眼前に信じがたい光景がもよおされ、言葉を失うこともあれば、意見の対立が深く激しくなり、ついに口がきけなくなったりもする。

釈迦が人々の前に黙って持ち上げた蓮の花に、弟子の迦葉かしょうが微笑みで応えた有名な対応は、言葉を越えた無言の交通を意味しよう。逆に、イエスは十字架に架けられ、天に向かって「父よ、私を見捨てるのですか」と問いかけ、神の沈黙に暗示を受け取る。また昔観た映画に、無実の罪で死刑宣告を受けながら、黙って死を選ばざるを得ないシーンを思い出す。つまり、言葉や弁明を断つ沈黙もある。無言で通じ合うこともあるが、沈黙が不明の対応であることもあり、拒否か、通じ合えぬ場合もある。

再言すれば、沈黙は一切の言語を否定するそれであることもあれば、沈黙という仕方でも語ることもあるということだ。意思表示に沈黙の仕方があるということは、言語にとつて脅威であろう。言語論者からすれば、沈黙は音声も記号表示もないゆえに、言語でも表現でもないに違いない。しかし端的に言つて、沈黙を非現実視したり無きものにしたりはできない。時として沈黙の否定と肯定の両義性は、いかなる言葉よりも高度な表現力の証であろう。「沈黙は金なり」という。

沈黙は、ロゴスと対比されることはあつても、言葉と反対概念ではない。沈黙も一つの態度、立場の表明であり、言葉と違う表現の方法である。言葉ばかりが意思表示でないのは言うまでもない。相手の言葉よりも、むしろその目つきや顔色または行動でより確かな判断を下すこともある。スポーツや踊り、音楽、美術、ジェスチュアなどが言葉でない表現であるばかりか、それらもまた言葉でないもつと雄弁な言葉であることは多言を要しまし。言葉を突き詰めていくと、ついに詰まつてくる。言葉には限界があるということだ。言葉に詰まつた時は沈黙せざるを得ない。ところで考え抜いた先には大抵言葉がない。そしてまた、究極的決定的瞬間に出会うと沈黙せざるを得ないが、その時、無限の暗示が広がる。

私はアーティストとして沈黙のことを考えている。アートでは、通常の言葉とは異なる沈黙の在りように遭遇する。音楽は聴覚を媒介にするのに対し、絵画や彫刻は視覚を媒介にする。言語に関わる沈黙と非言語的な耳と眼差しの沈黙は当然異なる。言語に関わる沈黙は、言葉の途絶が特徴であるが、耳や眼差しのそれはむしろ言い得ぬものとの出会いであることが多い。言語で届かないものが、音律や絵づらでは直接に伝わったりもする。バッハの平均律クラヴィアの遠い宇宙から届くようなピアノの音律の流れは、ほとんど無人の空間の震えと言つていい。また、ベートーヴェンの交響曲第五番の冒頭は、沈黙が前提で、突然それを打ち破るところから始まる。そして最後は、激しい音律を断ち切るところで終わっている。私は思うに、そもそも音楽なるものは、沈黙をベースにしないと成立しない。エル・グレコの聖画には、青黒の荒つぱいタッチの不穏な空、そこに配された怯えるような人物の形象など、画面に異様な沈黙が漂う。また十七世紀、清の龔賢ゴンシェンの山水画では、濃い墨彩の畳み重ねで、黒々と無人の山河が音を消したように肅々と広がっている。どちらも言葉が隠蔽されているか無音化されているのに、エタイの知れない響き合いがじんと伝わってくるのだ。ところで音楽や絵画の大半は、沈黙や無言であるところか、むしろ文学的である。音律や絵づらがストーリーや状況を語るように仕組まれている。宗教的音楽、美術、または革命だの戦争だの、日常生活を描く作品などにも、擬似的言語表現に近いものが多い。しかし

I を進めるほどに、音律や絵づらは、それら本来の表現力を弱めたり失つて、つまらぬ説明ものとなる。やはり表現の媒体は、可能な限りそれ自体の性格を生かした展開である時、より強い力を発揮する。そしていよいよ音律や絵づらから言葉が遠ざかった時、そこに沈黙が現われる。

広いキャンバスに鋭い切り口を付けたルーチョ・フォンタナの絵画とか、赤茶または暗褐色を筆でこすつたり塗りたくつたりして、仄暗く茫洋とした色面を広げたマーク・ロスコの絵画には、深い沈黙が漂う。絵画の沈黙は、言葉の途絶えと違つて、眼差しの出会う未知のフィールドの広がりと言つていい。言い直せば、言葉の途絶えた沈黙があるかと思えば、言葉を越えたものとの眼差しの応答もあるということだ。

人は私の多くの作品に、沈黙を感じるといふ。ドンジュウで幅広い鉄板を壁に立て掛け、その前に大きな自然石を置いた作品では、空間との響き合いに無言のこだまを見る。そして、大きなキャンバスに平筆で白から黒に広がるグラデーションのストロークを一つか二つ描いた画面は、緊張と解放のせめぎ合う空間となり、それが沈黙のバイブレーションとして迫ってくる。このことは、私の作品が言葉や音声の途絶えと共に、言い得ぬものとの出会い、そして無言の応答をもよおしていることを表わしていよう。

おそらく音楽家の究極の関心は、音の向こうにある。私の関心も似ている。絵画や彫刻において、語り出ぬもの見え得ぬものの次元を開いてみたい。私の作品の波状は、まだ人間の言葉の領域から遠くない。何処まで行けるか、沈黙の彼方は遠くて深い。

(李禹煥『両義の表現』による)

注 エル・グレコ……スペインの画家。(一五四一〜一六一四)

龔賢……明末清初の書画家。(？〜一六八九)

ルーチョ・フォンタナ……イタリアの彫刻家・画家。(一八九九〜一九六八)

マーク・ロスコ……アメリカの画家。(一九〇三〜一九七〇)

問八 傍線部A「沈黙の否定と肯定の両義性」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 沈黙は音声や記号表示を否定しながら、言語を用いた意思表示を可能にしている。
- ロ 沈黙は言語による表現を否定しながら、同時に言語とは別の表現の方法でもある。
- ハ 沈黙は人の意思疎通を否定しながら、暗示による言語の伝達性は可能にしている。
- ニ 沈黙は言葉の途絶えを否定しながら、言語を超越した高度な表現力の証でもある。

問九 傍線部B「究極的決定的瞬間に出会うと沈黙せざるを得ないが、その時、無限の暗示が広がる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 言葉で表し得ぬ出来事に直面したとき、それを表出し共有するには、言語以外の直接五感に訴える多様な方法の可能性がありうるということ。
- ロ 反論のしようのない絶対的な現実にも否応なく直面したとき、沈黙は無言の抗議にも、絶望の諦観にも、命がけの拒否にもなりうるということ。
- ハ 一生に一度しかないという感動に出会ったとき、芸術家は沈黙しつつも、頭の中ではこの感動を表現する手段を必死で考えているということ。
- ニ これこそが芸術であるという自然の本質に触れたとき、文学は何の表現力も持ちえず、ただ沈黙して音楽や絵画に地位をゆずるしかないこと。

問十 傍線部C「言語で届かないものが、音律や絵づらでは直接に伝わったりもする」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 言語にとっての沈黙はコミュニケーションの拒否であるが、音楽や絵画は誰でも聞いたり見たりできて、作品の表現を受け止められるから。
- ロ 言語にとっての沈黙は人と人との意思疎通を遮断するものだが、音楽や絵画では人の魂が直接共鳴する応答であって意志の隔絶がないから。
- ハ 言語にとっての沈黙は表現の限界であるが、音楽や絵画においては言葉で表現し得ぬものとの未知の出会いや無言の応答を提供しうるから。
- ニ 言語にとっての沈黙は意思表示か拒否か不明な場合があるが、音楽や絵画は作品が伝えるものをそのまま享受すればよく、迷いがいいから。

問十一 空欄 I に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 言語の抽象化
- ロ 言語の芸術化
- ハ 言語の理想化
- ニ 言語の代用化

問十二 空欄Ⅱの段落は次の①から④の文章から構成されるが、その並べる順序として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- ① 私は、人間の言葉を拒むわけではないが、人間以外の音や声にも耳を傾けてみたい。
- ② それは作品が特定の素材や方法の駆使もさることながら、やはり発想の根幹が自然や外部との関わりにあるためであろう。
- ③ 私の作品にみられる沈黙の性格は、おそらく非一人的だ。
- ④ それも耳に届いたり眼に映る音や色彩を越えて、広大な宇宙に満ちている鳴らぬ音、聴こえぬ言葉に出会いたいのだ。

イ ①↓②↓③↓④

ロ ②↓①↓③↓④

ハ ③↓②↓①↓④

ニ ④↓②↓①↓③

問十三 本文の趣旨と合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 沈黙は無言の対応という形で、人と人との間の交流のみならず、人間と人間以外のものとの間の言葉を越えた未知の出会いを表現することもできる。
- ロ 沈黙とは、言語の限界を克服する雄弁な表現の方法であって、絵画や彫刻、音楽などの芸術においては、擬似的な文学表現を指向するものである。
- ハ 筆者は沈黙という状態を、言語での意思疎通に反対する概念ではなく、表現の一形態と捉えて、言語と非言語の芸術の性格の違いを対比している。
- ニ 筆者は自然における聞こえないものや見えないものを言語を介在させずに感じ取り、絵画や彫刻などの芸術作品によって表出したいと考えている。

問十四 傍線部1・2のカタカナの部分を漢字に直し、記述解答用紙の所定の欄に記せ(楷書で丁寧書くこと)。

次の文章は、荒木浩『京都古典文学めぐり―都人の四季と暮らし』（二〇二三年）の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。問題文中の古文・漢文は、原文を読みやすく改めたり、返り点・送り仮名・読点などを省いたりした箇所がある。

その所のさまを言はば、南に懸樋あり。岩を立てて水をためたり。林の木ちかければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を音羽山といふ。まさきのかづら、跡づづめり。谷しげけれど、西晴れたり。観念のたより、なきにしもあらず。春は、藤浪を見る。紫雲のごとくして西方に匂ふ。夏は、郭公を聞く。語らふことに死出の山路をちぎる。秋は、蝸の声耳に満り。空蟬の世をかなしむ楽と聞こゆ。冬は、雪をあはれぶ。積もり消ゆるさま罪障にたとへつべし。もし念仏ものうく読経まめならぬ時は、みづから休み、みづから怠る。さまざまる人もなく、又、恥づべき人もなし。ことさらに無言をせざれども、独り居れば、口業を修めつべし。必ず禁戒をまもるとしもなくとも、境界なければ、何につけてか破らん。

もし跡の白波にこの身を寄する朝には、岡屋に行きかふ舟をながめて満沙弥が風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴らす夕には、潯陽の江を想ひやりて源都督の行ひをならふ。もし余興あれば、しばしば、松のひびきに秋風樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。〔方丈記〕

自然は芸術を模倣する。自然が私たちを感動させるのは、読んできた詩や、観てきた絵など、蓄積した芸術体験がもたらす効用にすぎないと、オスカー・ワイルドの戯曲『嘘の衰退』はいう。この場面が、まさにそうだ。長明は、自分を取り囲む四季の推移を宗教的な美しい言葉で粹取り、和歌、漢詩文、音楽（管絃）という、貴族的教養の輻輳に身を委ねながら、孤独で殺風景な山中の夜明けと夕べを、豊かな文化的風景として彩っていく。

まずは朝。日野からは西南にあたる、巨椋池東端の岡屋を眺め、沙弥満誓の和歌「世の中を何に譬へむあさばらけこぎゆく舟のあとの白波」（『拾遺集』他）の無常観に浸る。夕べは漢詩。白居易の『琵琶行』を想う。中国江州の潯陽江のほとり。夜、舟の客を送る時、楓が風に音を立て、どこからか、都を偲ぶ琵琶の音が聞こえてくる、との風情である。そして音楽へ。桂という詞から、琵琶桂流の祖とされる、桂大納言源経信を慕い、琵琶を奏でる。経信は、長明の和歌の師・俊恵の祖父で、詩・歌・管絃の三道を極める一級の教養人であった。

『方丈記』がこの直前に詳述する庵の内装を見ると、西面の北側には阿弥陀仏と普賢菩薩の像を掛け、その前に『法華経』を置く。立派な修行の場ではあるのだが、その西面の南側には、竹のつり棚をしつらえて、黒い皮籠が三つ置かれている。その中には、『往生要集』の他に、和歌の本、管絃の本という、それぞれの抜書が、軽重なく置かれていた。そしてその傍らには、琴と琵琶を一面ずつ立てている。

## I

歌人長明は、楽人でもあった。『文机談』（十三世紀後半成立）によると、琵琶の師中原有安は、長明には伝授を尽くさず没してしまった。しかし「すき物」長明は、管絃の名人たちを集め、「賀茂のおくなる所」で、「秘曲づくし」を開催する。秘曲は、師匠から免許を得て伝え授けられた弟子だけが演奏できる、秘伝の重要楽曲である。名人たちの演奏に興が乗った長明は、伝授を受けてもいないのに、琵琶の秘曲『啄木』を、皆の前で数回演奏してしまっただけ、これを「もれ聞」いた琵琶の名人藤原孝道は、「おもし犯罪」だと後鳥羽院に告発した。そこまで咎めるべきことだろうか、との同情論もあったが、孝道は、「道の狼藉」だ、許すわけにはいかぬと「強く奏聞」を続けた。長明は「これにたへず」都を去り、「修行のみちにぞ思ひたちける」。そして「ふたみの浦といふ所に方丈の室をむすびてぞ、のこりのすくなき春秋をばおくりむかへける」という。ただし、これだと方丈の庵が伊勢の二見浦にあることになってしまふ。長明が伊勢に旅行したことがあるのは史実だが、『文机談』の話の真偽には文献批判が必要だ。

ともあれ、老齢を自覚する『方丈記』の長明も、かつてのうつつぶんを晴らすかのように、たった独りの閑居の地で『啄木』に次ぐ秘曲『流泉』を思いのままに弾じ、自足の境地を謳歌している。

意外なことだが、長明の大事な蔵書であった『往生要集』の著者・恵心僧都源信にも、和歌をめぐる因縁が伝わっている。源信はかつて、和歌は狂言綺語であり、修行の邪魔だと考えて、詠むことがなかった。ところが、ある日の曙のこと。比叡山横川の恵心院から「水うみ（＝琵琶湖）を眺望」していると、舟が沖を通るのを見て、ある人が「Ⅱ」と詠じたのを聴く。源信は深く感銘を受け、和歌は仏道修行の助け（観念の助縁）になると悟り、以後、詠歌を嗜むようになったという（『袋草紙』）。巨椋池の「岡屋に行きかふ舟をながめて満沙弥が風情をぬすみ」と書く長明の念頭には、この逸話がある。

こうした連想から、宇治川が流れ込む、風光明媚な巨椋池が、長明にとって「水うみ」琵琶湖を連想させる景観だったこともわかる。しかしこの大池は、豊臣秀吉の改修を契機に環境が劣化。昭和に入って、戦前に干拓され、姿を消してしまっただけでなく、

今はなき巨椋池は、平安京から南にあたる。南に池とは、都の四神相応にふさわしい光景であった。四神相応とは、「地相からみて、天の四神に応じた最良の土地柄」で、「左方（東）は青竜にふさわしい流水、右方（西）は白虎の大道、前方（南）は朱雀の汚池、後方（北）は玄武の丘陵を有すること。官位・福祿・無病・長寿を合わせ持つ地相で、日本の平安京の地勢はこれにあたるという。四地相応。」と『日本国語大辞典』第二版にも説明されている。



平安時代の『作庭記』は、「経云」として、家の作りにも四神相応が必要だと説く。

家より東に流水あるを青竜とす。もしその流水なければ、柳九本をうゑて青竜の代とす。西に大道あるを白虎とす。もしその大道なければ、楸七本をうゑて白虎の代とす。南前に池あるを朱雀とす。もしその池なければ、桂九本をうゑて朱雀の代とす。北後に岳あるを玄武とす。もしその岳なければ、檜三本をうゑて玄武の代とす。かくのごとくして、四神相応の地となしてゐぬれば、官位福祿そなはりて、無病長寿なりといへり。

だから寝殿造には、南に池がある。この「四神相応は、五行説によれば、「青<sub>ニ</sub>春、赤<sub>ニ</sub>夏、白<sub>ニ</sub>秋、黒<sub>ニ</sub>冬」となり、四季の要素を併せもつ」。すなわち「四神相応の四方四季観」へとつながっていく（小林正明「蓬萊の島と六条院の庭園」）。

四方四季については、三谷栄一『物語史の研究』に詳論があるが、たとえば御伽草子『浦島太郎』では、浦島が竜宮城へ行って戸を開けてみると、東には春の花が咲き、南は夏の景色がある。西は秋の紅葉が拡がり、北は雪が降っていた。家の四方に、四季が同時に現出する、ユートピアのイメージだ。「隠れ里」の昔話にも、そういう風景が出てくる。隠れ里とは言い得て妙だ。隠者の住まいには、四方四季への希求があった。本段の冒頭がまさにその証左である。

長明は、庵の南の懸樋から「その所のさま」を描き出し、四神相応の南の池のように「岩を立てて水をためたり」という。そして、音羽山山系にある庵の西側が、「大道」ならぬ、遠くを見渡せるロケーションにあることを叙述している。西方浄土の極楽を願ひ、沈む夕日を観想する、日想の修行に適した場所だ、というのである。

そこには、幻想的に美しい四季折々の情景が拡がっていた。春は藤の花房が風に揺れ、夏はホトトギスと語らう。そして秋はヒグラシの音が響き、冬は雪。特徴的なのは、春の景色が東ではなく西にあり、「紫雲のごとくして西方に匂ふ」と仏教的の世界観の中にあることだ。

この庵をめぐる四季の叙述には、典拠がある。慶滋保胤の『池亭記』という文章である。

就<sub>キテ</sub>隆<sub>たか</sub>為<sub>ニ</sub>小山<sub>ヲ</sub>遇<sub>レ</sub>窪<sub>ニ</sub>穿<sub>ニ</sub>小池<sub>ヲ</sub>池<sub>ヲ</sub>西<sub>ニ</sub>置<sub>キテ</sub>小堂<sub>ヲ</sub>安<sub>ニ</sub>弥陀<sub>ヲ</sub>池<sub>ヲ</sub>東<sub>ニ</sub>開<sub>キテ</sub>小閣<sub>ヲ</sub>納<sub>ム</sub>書籍<sub>ヲ</sub>池<sub>ノ</sub>北<sub>ニ</sub>起<sub>テ</sub>低屋<sub>ヲ</sub>着<sub>ケリ</sub>妻子<sub>ヲ</sub>凡<sub>ソ</sub>屋舎<sub>ハ</sub>十<sub>ノ</sub>之<sub>四</sub>池<sub>ノ</sub>水<sub>ハ</sub>九<sub>ノ</sub>之<sub>三</sub>菜園<sub>ハ</sub>八<sub>ノ</sub>之<sub>二</sub>芹<sub>ノ</sub>田<sub>ノ</sub>七<sub>ノ</sub>之<sub>一</sub>其<sub>ノ</sub>外<sub>ノ</sub>緑<sub>ノ</sub>松<sub>ノ</sub>島<sub>ノ</sub>白<sub>ノ</sub>沙<sub>ノ</sub>汀<sub>ノ</sub>紅<sub>ノ</sub>鯉<sub>ノ</sub>白<sub>ノ</sub>鷺<sub>ノ</sub>小<sub>ノ</sub>橋<sub>ノ</sub>小<sub>ノ</sub>船<sub>ノ</sub>平<sub>ノ</sub>生<sub>ノ</sub>所<sub>ノ</sub>好<sub>ム</sub>尽<sub>ク</sub>在<sub>リ</sub>於<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>況<sub>ハ</sub>乎<sub>ヤ</sub>春<sub>ハ</sub>有<sub>リ</sub>東<sub>ノ</sub>岸<sub>ノ</sub>之<sub>柳</sub>細<sub>ノ</sub>煙<sub>ノ</sub>嫋<sub>ノ</sub>娜<sub>ノ</sub>夏<sub>ハ</sub>有<sub>リ</sub>北<sub>ノ</sub>戸<sub>ノ</sub>之<sub>竹</sub>清<sub>ノ</sub>風<sub>ノ</sub>颯<sub>ノ</sub>然<sub>ル</sub>秋<sub>ハ</sub>有<sub>リ</sub>西<sub>ノ</sub>窓<sub>ノ</sub>之<sub>月</sub>可<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>披<sub>ヒラ</sub>書<sub>ヲ</sub>冬<sub>ハ</sub>有<sub>リ</sub>南<sub>ノ</sub>簷<sub>ノ</sub>之<sub>日</sub>可<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>炙<sub>ル</sub>背<sub>ヲ</sub>

春は、東側に柳がさやさとそよぎ、夏は、北戸に竹が生えていて、涼しい風が入ってくる。秋は、西の窓に月が照り、冬は、南の軒で日向ぼっこができる。この『池亭記』では、五行説とは南北が異なるが、保胤の「池亭」は、快適な四方の四季に囲まれていた。鴨長明は、この『池亭記』を徹底的に参照し依拠して、『方丈記』を書いた。

この『池亭記』にも典拠があった。全体としては『池上篇并序』（『白氏文集』巻六十）という白居易の詩文をもとにしつつ、四季の風景は、白居易が自分の愛する草庵を描く『草堂記』（『白氏文集』巻二十六）の叙法に准拠している。

匡<sub>きやう</sub>廬<sub>ろ</sub>奇<sub>ニ</sub>秀<sub>ニ</sub>甲<sub>ニ</sub>天下<sub>ノ</sub>山<sub>ノ</sub>北<sub>ノ</sub>峰<sub>ヲ</sub>曰<sub>ヒ</sub>香<sub>ノ</sub>炬<sub>ト</sub>峰<sub>ノ</sub>北<sub>ノ</sub>寺<sub>ヲ</sub>曰<sub>フ</sub>遺<sub>ノ</sub>愛<sub>ノ</sub>寺<sub>ト</sub>介<sub>スル</sub>峰<sub>ノ</sub>寺<sub>ヲ</sub>間<sub>ノ</sub>其<sub>ノ</sub>境<sub>ノ</sub>勝<sub>ノ</sub>絶<sub>ニ</sub>又<sub>ニ</sub>甲<sub>ニ</sub>廬<sub>ノ</sub>山<sub>ノ</sub>元<sub>ノ</sub>和<sub>ノ</sub>十<sub>ノ</sub>一<sub>ノ</sub>年<sub>ノ</sub>秋<sub>ノ</sub>太<sub>ノ</sub>原<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>白<sub>ノ</sub>樂<sub>ノ</sub>天<sub>ノ</sub>見<sub>テ</sub>而<sub>テ</sub>愛<sub>スル</sub>之<sub>ヲ</sub>若<sub>ク</sub>遠<sub>ニ</sub>行<sub>ク</sub>客<sub>ノ</sub>過<sub>ル</sub>故<sub>ノ</sub>郷<sub>ノ</sub>恋<sub>ノ</sub>恋<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ル</sub>去<sub>ル</sub>因<sub>リテ</sub>面<sub>シ</sub>峰<sub>ノ</sub>腋<sub>ニ</sub>寺<sub>ヲ</sub>作<sub>ス</sub>為<sub>ス</sub>草<sub>ノ</sub>堂<sub>ヲ</sub>明<sub>ノ</sub>年<sub>ノ</sub>春<sub>ノ</sub>草<sub>ノ</sub>堂<sub>ノ</sub>成<sub>ル</sub>三<sub>ノ</sub>間<sub>ノ</sub>兩<sub>ノ</sub>柱<sub>ノ</sub>二<sub>ノ</sub>室<sub>ノ</sub>四<sub>ノ</sub>牖<sub>ノ</sub>（中略）春<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>錦<sub>ノ</sub>繡<sub>ノ</sub>谷<sub>ノ</sub>花<sub>ノ</sub>夏<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>石<sub>ノ</sub>門<sub>ノ</sub>澗<sub>ノ</sub>雲<sub>ノ</sub>秋<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>虎<sub>ノ</sub>溪<sub>ノ</sub>月<sub>ノ</sub>冬<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>炬<sub>ノ</sub>峰<sub>ノ</sub>雪<sub>ノ</sub>陰<sub>ノ</sub>晴<sub>ニ</sub>顯<sub>シ</sub>晦<sub>シ</sub>昏<sub>ニ</sub>旦<sub>ニ</sub>含<sub>シ</sub>吐<sub>シ</sub>千<sub>ノ</sub>變<sub>ノ</sub>万<sub>ノ</sub>狀<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>シ</sub>二<sub>ノ</sub>殫<sub>シ</sub>紀<sub>シ</sub>覩<sub>シ</sub>縷<sub>シ</sub>而<sub>テ</sub>言<sub>フ</sub>故<sub>ニ</sub>云<sub>フ</sub>甲<sub>ニ</sub>廬<sub>ノ</sub>山<sub>ノ</sub>者<sub>ナリト</sub>

清少納言『枕草子』が「香炬峰の雪いかならむ」と記した、あの香炬峰である。少し注釈しておけば、『枕草子』の

逸話の出典は、白居易『白氏文集』卷十六の律詩「香炉峰」下、新ト山居、草堂初成、偶題東壁」五首のうち第四首である。白居易は、元和十年（八一五）三月に江州に左遷となり、失意の中で、慧遠の浄土教で有名な、廬山の地を訪ねる。香炉峰は廬山の北峰で、遺愛寺は香炉峰の北側にある。白居易はその「香炉峰、北面、遺愛寺、西偏」（「香炉峰」下、新置草堂、即事詠懷、題於石上）、『白氏文集』卷七）に草堂を建てて愛し、多くの詩文を詠んだ。藤原公任は、『和漢朗詠集』下・山家（五五四・五五五）に、次のようにそれをまとめている。

遺愛寺鐘欵枕聽香炉峰雪撥簾看（五五四）  
蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中（五五五）

「蘭省、花時…」の方は『白氏文集』卷十七「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」からの採択で、『枕草子』「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」に、この句と「草の庵」をめぐり、有名なエピソードがある。

白居易はこの「草堂」に、信仰と心の休息地を見出す。草堂の四方（四傍）には、四季の美が展開している。春は、錦繡の谷の花が咲き、夏は、石門澗の雲が湧く。秋は、虎溪の月。そして冬は、香炉峰の白雪が美しい。ただしこれは『作庭記』が記すような、我が家の庭ではない。いわば借景だ。しかし借り物であるがゆえに、無限の四方に広がり有する。

小さな隠者の住まいは、その無所有と引き換えに、四方四季の宇宙に包まれることができる。それが閑居の理想であった。

若き日の長明は、巨大な空間の中に住んでいた。下鴨神社の社地は広大だ。かつて長明の四神相応・四方四季は、社域内で完結しえたことだろう。たとえば『うつほ物語』の神南備種松の豪邸や『源氏物語』の六条院、あるいは藤原頼通の高陽院のように。

しかし長明は、鬱屈する外的事情の中で意志を固め、父方祖母の家を出て、河原近くに初めての庵を建てた。旧宅と比べて十分の一の小ささだという。そして「五十の春を迎へて、家を出て世を背けり」。その後「六十の露消えがたに及びて」、ついに極小の方丈の庵を構える。「かけがね」だけで造った家で、掘立の柱もない。「土居」という土台を組み、いつでも移動ができるようにしてある。旅人が一晩の宿を造り、歳をとった蚕が繭を作るようなものだ。最初の庵と比べても、百分の一にも及ばない、という。

そう自虐的に語りつつ、長明は、「いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、暫しも此の身を宿し、たまゆらも心をやすむべき」と真摯に問い、結局「広さはわづかに方丈、高さは七尺がうち也。所を思ひ定めざるが故に、地を占めてつぐららず」と決め、方丈の庵に住む意義を述べる。

この「栖は、すなはち浄名居士の跡をけがせり」と、『方丈記』は、我が庵建立の意図を告白している。インドの浄名居士すなわち維摩詰が住んだ方丈がモデルだというのだ。『今昔物語集』卷三第一話の説明によれば、維摩の「居給へる室は、広さ方丈」に過ぎないが、この小さな部屋には、何人でも入ることができる。

其の室の内に十方の諸仏来り集まり給ひて、為に法を説き給へり、各無量無数の菩薩・聖衆を引具し給ひて、彼の方丈の室の内に各微妙に莊嚴せる床を立てて、三万二千の仏、各其の床に坐し給ひて法を説き給ふ。無量無数の聖衆、各皆随へり。

仏は、この「室をば「十方の浄土に勝れたる甚深不思議の浄土也」と説き給ひけり」という。長明の憧れた「方丈」は、世界の全てを包み込む、宇宙のような無限であった。

維摩居士の方丈は、石室であつたらしい。六世紀には、三蔵法師玄奘や王玄策によつて、インドのヴァイシャリー国に残る維摩方丈の遺跡が発見されている。しかし長明の方丈の草庵は、その「浄名居士の跡」を承けながら、「跡」を遺さぬ組立式で、永遠の移動を本質とする。方丈の庵は、長明自身と、また彼の心と一体の空間であつた。極限まで小さな点となった家に、一体的に居住する長明の心。それは、求心的に内向しつつ、同時に、外へ向かつて庵を突き抜けて果てしない宇宙と交感することだろう。心の隠喩としての住まい、世界の譬喩としての住まい、そして宇宙の集約としての我が心。そのように交叉する精神性こそ、長明にとって、方丈の庵のもっとも大事な要素であつた。

注 江州……地名。現在の中国江西省一帯の地域。潯陽江……河川名。長江（揚子江）の別名。

楓……紅葉する落葉高木。ここでは桂に同じ。汚池……水たまりの池。

十之四……十分の四。嫋娜……しなやかで美しい。

匡廬……山名。現在の中国江西省九江市にある廬山のこと。元和十一年……西暦八一六年。

太原……地名。現在の中国山西省の省都。牖……まど。

錦繡谷……溪谷名。廬山にある。石門澗……溪谷名。廬山にある。

虎溪……溪谷名。廬山東林寺の前にある。覬縷……事細かに。

慧遠……東晋代の僧侶。東林寺に住し念仏実践を行った。

蘭省……白居易が勤務していた長安の尚書省。

維摩詰……維摩居士。天竺の商人で、釈尊の在家の弟子。

玄奘……唐代の訳経僧。天竺に仏典を求めた。王玄策……唐代の外交官。天竺に赴いた。

問十五 傍線部1「語らふごとくに死出の山路をちぎる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 郭公の声は、死後に越えなければならぬ山に導くと言われているので、それを聞くたびに道案内をしてくれると約束をしているように感じている。

ロ 郭公の声は、この世とあの世を隔てる三途の川を渡る時に聞こえるとされており、死後、西方浄土における救済が約束されるようだと安堵している。

ハ 方丈の庵の南の懸樋に岩を立て水をためているので、夏には郭公がよく訪れるが、その声は死への誘いのように聞こえるため恐怖をかきたてている。

ニ 春の藤は浪のように見え美しく、極楽往生する際に現れるという紫雲のようであるが、夏の郭公の声はそれと対照的に死後の恐怖を示すかのようだ。

ホ 夏には人が通れなくなるほど生い茂る音羽山のかずらに、郭公が降りて鳴く声はもの悲しげに聞こえて死への旅立ちを覚悟させるかのように思える。

ヘ 秋の蟬の声が世のはかなさを示し、冬の積雪は積もったり消えたりする罪科に喩えられるのと同様、夏の郭公の声は死に向かう恐れを示唆している。

問十六 傍線部2「読経まめならぬ時」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 体調悪化で読経できない時

ロ 読経をまじめにできない時

ハ 読経を夢中に行っている時

ニ 気合いを入れて読経する時

ホ 読経を声を出さずに行う時

ヘ 安易な気持ちで読経する時

問十七 空欄 I に入る文章として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自然が芸術を模倣するがゆえに、豊穡な貴族的教養の輻輳に思わず身を委ねられる。

ロ 幻想的な四季折々の情景の中に、西方浄土を願うための質素な什物が飾られていた。

ハ 白居易が都を偲ぶ風情は、潯陽江の琵琶の音を想い起こさせるような装置であった。

ニ 極小の閑居は、いつしか和漢の時空を往来する、豪華な芸術空間へと変貌していく。

ホ 歌人ではなく楽人長明として、秘曲を演奏するための周到な準備が整えられていた。

ヘ 長明は方丈の庵を、伊勢の二見浦ではなく巨椋池のほとりに構えることを決意した。

問十八 空欄 II に入る適切な語句を、本文から十二字以内で抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記せ。句

読点がある場合は、一字と数える（楷書で丁寧に書くこと）。



問二十三 『方丈記』よりも前に成立したと考えられる作品を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- |   |       |   |        |   |     |
|---|-------|---|--------|---|-----|
| イ | 十六夜日記 | ロ | 十訓抄    | ハ | 承久記 |
| ニ | 千載和歌集 | ホ | とはずがたり | ヘ | 増鏡  |

問二十四 本文の趣旨と合致するものを、次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 長明の旧居である広大な下鴨神社の南には水路をまたぐ橋があり、西は晴れの時には眺望がよく、春の藤棚からは強い香りが漂い、夏の郭公の声に涼しさを増し、秋の蟬の声は音楽のように美しく、冬の雪の白い色により罪障が消え去る。

ロ 自然が私たちを感動させるのは、詠んできた詩や、観てきた絵など、蓄積した芸術体験がもたらす効用にすぎないとされるが、鴨長明には四季の推移が多神教的な意味を持ち、風光明媚な巨椋池は仏神を仰ぐ修行に理想的な隠れ里である。

ハ 浦島太郎が竜宮城に行き戸を開けてみると四方に四季が同時に出現したというが、長明も白居易や慶滋保胤の先例にならない、方丈の庵に四季を見出そうと様々な工夫を加え、『源氏物語』の六条院のような広大な屋敷を精神的模範とした。

ニ 家の作りにも四神相応が必要であり、東に流水があるのを青竜、西に大道があるのを白虎、南に池があるのを朱雀、北に丘があるのを玄武とするような地に居住することができれば、福德長寿で高い官位を得ることができるとされていた。

ホ 白居易は江州に左遷され、廬山の草堂に閑居して詩文を作ったが、特に遺愛寺の鐘の音、香炉峰の雪、あるいは雨の廬山の草庵を詠んだ詩は、平安時代の殿上人や女房たちのあいだに広まることになり、教養が共有されることにもなった。

ヘ 『今昔物語集』に述べる維摩居士の方丈の石室には、狭い空間にもかかわらず、十方から三万二千もの諸仏が集って菩薩や聖衆のために互いに互いに法を説き合い、南の懸樋からは西方浄土の晴れやかな様子をはるか彼方に見渡すことができた。

〔以下余白〕